

# 三年とうげ

李 錦玉・作

あるところに、三年とうげとよばれるとうげがありました。

あまり高くない、なだらかなとうげでした。

春には、すみれ、たんぽぽ、ふでりんどう。とうげからふもとまでさきみだれました。れんげつつじのさくころは、だれだったため息の出るほどよいながめでした。

秋には、かえで、がまずみ、ぬるでの葉。とうげからふもとまで美しく色づきました。

白いすすきの光るころは、だれだったため息の出るほどよいながめでした。

三年とうげには、昔から、こんな言いつたえがありました。

「三年とうげで 転ぶでない。」

三年とうげで 転んだならば、

三年きりしか 生きられぬ。

長生きしたけりや、

転ぶでないぞ、

三年とうげで 転んだならば、

長生きしたくも 生きられぬ。」

ですから、三年とうげをこえるときは、みんな、転ばないように、おそるおそる歩きました。

ある秋の日のことでした。一人のおじいさんが、となり村へ、反物売りに行きました。

そして、帰り道、三年とうげにさしかかりました。白いすすきの光るころでした。

おじいさんは、こしを下ろしてひと息入れながら、美しいながめにうっとりしていました。しばらくして、

「こうしちゃおれぬ。日がくれる。」

おじいさんは、あわてて立ち上がると、

「三年とうげで 転ぶでないぞ。」

三年とうげで 転んだならば、

三年きりしか 生きられぬ。」

と、足を急がせました。

お日さまが西にかたむき、夕やけ空がだんだんくらくくなりました。

ところがたいへん。あんなに気をつけてあるいていたのに、おじいさんは、石につまずいて転んでしまいました。おじいさんは、真っ青になり、がたがたふるえました。

家にすっとなでいき、おばあさんにしがみつき、おいおいなきました。

「ああ、どうしよう、どうしよう。わしのじゅみょうは、あと三年じゃ。三年しか生きられぬのじゃあ。」

その日から、おじいさんは、ごはんも食わずに、ふとんにもぐりこみ、とうとう病気になるってしまいました。お医者をよくやら、薬を飲ませるやら、おばあさんはつきつきりで

かん病しました。けれども、おじいさんの病気はどんどん重くなるばかり。村の人たちもみんな心配しました。

そんなある日のこと、水車小屋のトルトリがみまいに来ました。

「おいらの言うとおりにすれば、おじいさんの病気はきつとなおるよ。」

「どうすればなおるんじや。」

おじいさんは、ふとんから顔を出しました。

「なおるとも、三年とうげで、もう一度転ぶんだよ。」

「ばかな。わしに、もっと早くしねと言うのか。」

「そうじゃないんだよ。一度転ぶと、三年生きるんだろう。二度転べば六年、三度転べば九年、四度転べば十二年。このように、何度も転べば、ううんと長生きできるはずだよ。」

おじいさんは、しばらく考えていましたが、うなずきました。

「うん、なるほど、なるほど。」

そして、ふとんからはね起きると、三年とうげに行き、わざとひっくり返り、転びました。

このときです。ぬるでの木のかげから、おもしろい歌が聞こえてきました。

「えいやら えいやら えいやら。」

一ぺん転べば 三年で、

十ぺん転べば 三十年。

百ぺん転べば 三百年。

こけて 転んで ひざついて、しりもちついて でんぐ

り返り、長生きするとは、こりや めでたい。」

おじいさんは、すっかりうれしくなりました。

ころりん、ころり、すってんころり、ぺたんころり、ひよいころ、ころりと、転びました。あんまりうれしくなったので、しまいに、とうげからふもとまで、ころりんと、転がり落ちてしまいました。そして、けるけろつとした顔をして、

「もう、わしの病気は治った。百年も、二百年も、長生きできるわい。」

とにこにこわりました。

こうして、おじいさんは、すっかり元気になり、おばあさんと二人なかよく、幸せに、長生きしたということです。

ところで、三年とうげの木のかげで、

「えいやら えいやら えいやら。」

一ぺん転べば 三年で、

十ぺん転べば 三十年。

百ぺん転べば 三百年。

こけて 転んで ひざついて、しりもちついて でんぐ

り返り、長生きするとは、こりや めでたい。」

と歌ったのは、だれだったのでしょうか。